

第 7 回チャンピオン・メイヤー・ミーティング 仙台市長発言要旨

ラウンドテーブル1:テーマ「不確実な時代におけるすべての人のための都市」

人口減少や少子高齢化が進む中、将来にわたり都市が持続的に発展するには、誰もが安心して住み続け、自分らしく活躍できるまちの実現が不可欠である。2 年前にチャンピオン・メイヤーとして初めてこの会合に参加し、包摂的成長の議論を交わす中で、このような思いを強めたもの。

本市で 1969 年に始まった、車いす利用者と学生ボランティアによる福祉のまちづくり活動は、全国的な運動に発展し、1973 年に、国から全国初の「身体障害者福祉モデル都市」の指定を受けた。また、東日本大震災の経験を踏まえた、全小中学校での仙台版防災教育、女性防災リーダーの育成や障害者の視点を取り入れた防災の取組は、子どもから高齢者まで、また女性・障害者など、さまざまな立場の人が防災・減災に関わりながら防災環境都市づくりを進める、世界に誇るものと考えている。

このような本市の歴史や風土、市民協働などの都市個性を土台とし、これを発展させる形で、「仙台らしいダイバーシティまちづくり」を目指したいと考え、3月に『仙台市ダイバーシティ推進指針』を取りまとめ、各般の施策や計画等をダイバーシティの観点から捉えなおしていく方向性を示した。この推進指針では、近年の OECD の議論において重要性が強調されている、地域に根差したアプローチの考えも基本に据えている。

推進指針の視点の一つとして「ちがい」への理解を深め、尊重することを掲げている。特に、これからの社会を担う子どもたちが、世界の一員として早くから多様な価値観に触れ、柔軟な思考や国際感覚を身に着けることが重要と考えており、他者や他の文化との違いを理解し、他者と積極的にコミュニケーションを図り、協働して問題を発見・解決できる力を育むことができるよう、新たに国際的な視点に立った教育を推進していくこととしている。

また、多様な価値観の掛け合わせによるイノベーションの創出も掲げており、その実践として、ジェンダード・イノベーションにも産学官民連携で取組み始めたところ。「ちがい」は克服するものではなく、価値あるものという考え方を共有しながら仙台にふさわしいダイバーシティまちづくりを進めていく。

ラウンドテーブル 2: テーマ「包摂的な都市のためのモビリティの未来に注目」

本市では高齢者や障害者にも安心して快適に利用いただける公共交通機関となるよう、1998 年から市営バスで低床車両の導入を進め、ほぼすべての車両で導入している。また、地下鉄駅へのバリアフリートイレの設置や車内への車いす・ベビーカースペースの整備、ホームと車両の段差解消など、バリアフリーの取組みを推進してきたところ。

高齢化や人口減少が急進する中であって、都市の活力を維持・向上させるためには、持続可能な都市のモビリティを再構築することが重要と捉えており、とりわけ交通事業者の人手不足が大きな課題である。そこで仙台市では、城跡などの文化財や川辺の公園など、様々な観光資源が集まる象徴的なエリアにおいて自動運転 EV バスの運行実験に取り組んでいる。この取組みによって、運行事業者における乗務員不足といった地域の課題解決に寄与するだけでなく、ゼロカーボンで持続可能な社会の実現にも貢献している。

また、バスや地下鉄といった公共交通機関と水族館や天文台などの施設、イベントのデジタルチケット販売と、デジタルマップによる情報発信機能を組み合わせたアプリケーションを構築した。このアプリケーションにより、まちのイベント情報と移動・参加に必要なチケットを、検索から決済までシームレスに利用することができ、公共交通機関の利用促進に寄与している。

このアプリケーションの運用や自動運転 EV バスの運行実験は産学官連携のコンソーシアムで議論しながら進めているものであり、持続可能でスマートなモビリティソリューション実現に向けて多様なステークホルダーがそれぞれの役割を果たしている。